

鹿児島県本土から得られた九州沿岸初記録のヒメハゼ属の一種 A

中村亮太¹・是枝伶旺²・本村浩之³

Author & Article Info

¹鹿児島大学水産学部（鹿児島市）

k9948835@kadai.jp

²鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿児島市）³鹿児島大学総合研究博物館（鹿児島市）

motomura@kaum.kagoshima-u.ac.jp (corresponding author)

Received 16 August 2025

Revised 19 August 2025

Accepted 20 August 2025

Published 20 August 2025

DOI 10.34583/ichthy.58.0_62

Ryota Nakamura, Reo Koreeda and Hiroyuki Motomura. 2025. First Kyushu records of *Favonigobius* sp. A sensu Momose (2024) from the Kagoshima mainland, Kyushu, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 58: 62–66.

Abstract

A single specimen of *Favonigobius* sp. A sensu Momose (2024) was collected from the Satsuma and Osumi peninsulas on the Kagoshima mainland in Kyushu, Japan, respectively. The species has previously been recorded only from Japan, specifically from Chiba Prefecture and the Nansei Islands (the Osumi to Yaeyama islands). Thus, the present specimens, described herein detail, represent the first records from Kyushu.

ヒメハゼ属 *Favonigobius* Whitley, 1930 はハゼ科の一属で、河川汽水域や沿岸浅所の砂底や砂泥底に生息する（瀬能ほか, 2021）。本属魚類はインド・太平洋に広く分布し、日本国内からはヒメハゼ *Favonigobius gymnauchen* (Bleeker, 1860), ツマジロヒメハゼ *Favonigobius opalescens* (Herre, 1936), ミナミヒメハゼ *Favonigobius reichei* (Bleeker, 1854), およびクロヒメハゼ *Favonigobius melanobranchus* (Fowler, 1934) の4有効種と、ヒメハゼ属の一種 A–D *Favonigobius* spp. A–D sensu Momose (2024) の4学名未確定種が報告されている（明仁ほか, 2013；百瀬, 2024）。

2023年10月に鹿児島県薩摩半島から、2024年12月に鹿児島県大隅半島からそれぞれ1個体のヒメハゼ属の一種 A が採集された。本種は大隅諸島以南から主に記録されており、九州以北では千葉県館山市からのみ記録されていた（百瀬, 2024）。鹿児島県本土産の標本は本種の九州沿岸初記録となるため、出現状況と共にここに報告する。

材料と方法

標本の計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm 単位で行ったものを 0.1 mm 単位に四捨五入して表記した。標準体長（standard length）は体長または SL と表記した標本の計数・計測は以下を除き渋川ほか（2011）にしたがった。縦列鱗数の計数方法は是枝ほか（2024）に、尾鰭条数の計数方法と体幅の計測方法は渋川ほか（2017）にしたがった。頭部感覚管と感覚管開孔の名称は明仁親王（1984）にしたがった。雌雄の判別は百瀬（2024）にしたがった。標本の作成、登録、撮影、および固定方法は本村（2009）に準拠した。本研究に用いた標本は鹿児島大学総合研究博物館（KAUM）に保管されており、生鮮時の写真は同館のデータベースに登録されている。

Favonigobius sp. A sensu Momose (2024)

ヒメハゼ属の一種 A

(Fig. 1; Table 1)

標本 KAUM-I. 191342, 雌, 体長 17.9 mm, 鹿児島県南さつま市坊津町久志丸木浜 丸木浜川, 31°17'24"N, 130°12'44"E, 水深 0.05 m, タモ網, 2023年10月22日, 是枝伶旺; KAUM-I. 213724, 雄, 体長 22.1 mm, 鹿児島県肝属郡肝付町南方, 31°16'20"N, 131°04'44"E, 水深 0.1 m, タモ網, 2024年12月1日, 中村亮太。

記載 体は円筒形で細長く、やや側扁する。頭部は大きく、やや縦扁する。眼は大きく、頭部背側に位置し、側面から見ると眼の上半分は体の輪郭から突出する（KAUM-I. 191342 においては側面から見た眼の上部が体の輪郭からやや盛り上がる程度）。両眼間隔は狭い。吻は眼径より短い。吻端は眼の下縁を通る水平線よりわずかに下に位置し、やや丸みを帯びる。鼻孔は二対あり、前鼻孔は眼前縁と吻端を結んだ直線上に位置し、上唇の直後に開孔する。前鼻孔は先端に短い鼻管をもち、側面から見たときに鼻管は上唇にかからない。後鼻孔は前鼻孔より上方かつ眼の直前に開孔する。口は大きく、口裂は体軸に対して約 45 度上向きで、上顎の後端は瞳孔中央に達する。下顎

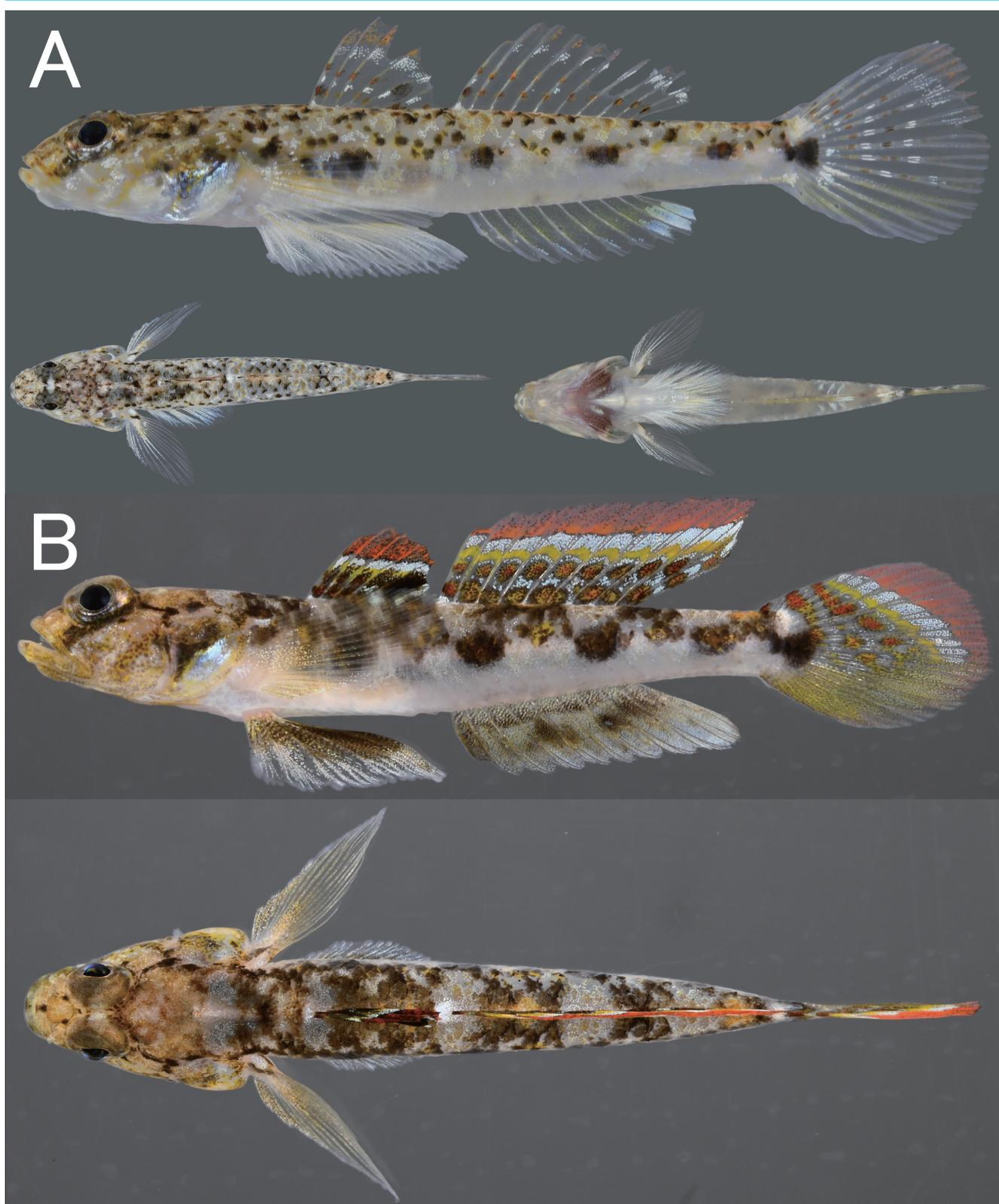


Fig. 1. Fresh specimens of *Favonigobius* sp. A from the Kagoshima mainland, Kyushu, Japan. A: KAUM-I. 191342, female, 17.9 mm SL, Satsuma Peninsula; B: KAUM-I. 213724, male, 22.1 mm SL, Osumi Peninsula.

先端は上顎先端よりも前方に突出する。歯列は上顎では2列，下顎では前方で3列，後方で2列をなす。上顎，下顎ともに外側の歯の方が大きい。いずれの歯も先端が尖る。左右の鰓蓋膜は眼後縁を通る垂線より後方で癒合する。鰓孔は主鰓蓋骨下縁より下方から胸鰭基底上端にかけて開孔する。肛門は第2背鰭起部直下よりわずかに前方に位置す

る。泌尿生殖突起は KAUM-I. 191342 では太短く丸みを帯び，KAUM-I. 213724 では細長い。

第1背鰭は丸みを帯びた三角形で，背鰭棘は伸長せず，第2棘が最長。第1背鰭起部は腹鰭基部後端よりも後方に位置し，第1背鰭基底後端は肛門直上よりわずかに前方に位置する。第1背鰭と第2背鰭は膜で繋がらない。第2背

鰭起部は肛門直上よりわずかに後方に位置する。第2背鰭軟条部上縁は直線状で、棘部は軟条部より低い。臀鰭起部は肛門の直後かつ第2背鰭第1軟条直下に位置し、臀鰭基底後端は第2背鰭基底後端直下よりわずかに後方に位置する。臀鰭軟条部下縁は直線状。臀鰭の棘と第1軟条間の鰭膜下縁は軟条部の下縁より低い。第2背鰭と臀鰭ともに KAUM-I. 191342 は後方の軟条ほど短いが、KAUM-I. 213724 は後方の鰭条ほど長い。胸鰭は前後方向に長い楕円形で、その後端は第2背鰭起部直下に達する。胸鰭基底上端は鰓孔上端の後方に位置し、胸鰭基底下端はその上端よりわずかに前方に位置する。腹鰭はやや大きく、左右が癒合した吸盤状。腹鰭膜蓋の後縁は円滑で、やや前方へ湾入する。上もしくは下から見た腹鰭後縁は円形。腹鰭起部は胸鰭基底上端直下に位置し、腹鰭後端は倒したときに肛門に達する。尾鰭は円形だが、KAUM-I. 213724 はやや前

後方向に長い楕円形。

主鰓蓋骨中央から後方の頭部背面と峽部を除き、頭部は無鱗。頭部背面の被鱗域は背面中央を中心として後方へ湾入する。腹鰭前方の鱗は円鱗で、皮下に埋没する。上記と各鰭を除き、体は櫛鱗に被われる。

前眼肩甲管孔、後眼肩甲管孔、前鰓蓋管孔をもち、前眼肩甲管孔は B', C (S), D (S), E, F, G, H', 後眼肩甲管孔は K', L', 前鰓蓋管孔は M', N, O' が開孔する。眼下の孔器列は1縦列、頬の孔器列は3-4縦列。頤には孔器が密集する。

色彩 生鮮時 (Fig. 1) —KAUM-I. 213724 の色彩を以下に示し、KAUM-I. 191342 が異なる場合にはカッコ内に記述した。体はやや緑みがかった白色で、腹面は白色（体色は淡く、体側上部と背面に白色小斑が散在する）。体背面に不明瞭な鞍状斑を有し、頭部直後から尾柄部にかけて5個縦列する（体背面の鱗後縁は黒色に縁どられ、鞍状斑を形成しない）。最前部の鞍状斑は赤みがかった茶褐色。最後部の鞍状斑は茶褐色に縁どられ、黄色みがかった橙色。上記以外の鞍状斑は茶褐色。鞍状斑は体軸よりやや上部の体側に達する。鞍状斑の間の体背面には5白色斑が縦列する。体側中央には瞳孔よりやや大きい楕円形の4黒色斑が縦列し、その間に4黄色小斑が縦列する。尾柄部後端に横長の黒色斑があり、その直上に1白色斑がある。頭部は黄色みがかった白色で、上顎と下顎は黄色。眼下縁から上顎中央付近にかけて幅広い茶褐色帯があり、上顎と垂直に交わる。頬は白色で、前鰓蓋骨後縁上端から上顎後端後方にかけて黄色く縁どられた茶褐色斑が帯状に並ぶ（茶褐色斑がなく、不明瞭な黄色帯）。主鰓蓋骨中央付近には三角形の茶褐色斑がある。背鰭上縁は朱色、白色、黄色の順に縁どられ、黄色部の下部に2赤褐色斑が縦列する（背鰭の鰭膜は白色半透明。背鰭軟条先端付近の鰭膜は朱色で、その下部は白色。背鰭各鰭条上に赤褐色点があり、第1背鰭と第2背鰭前部で2列、第2背鰭後部で1列の縦列を形成する）。第1背鰭第5-6棘間の鰭膜に瞳孔径よりやや大きい1黒色斑がある（黒色斑は瞳孔より小さい）。臀鰭下縁は後方にかけて太くなる白色帯に縁どられ、その上部には不明瞭な茶褐色帯がある（臀鰭の鰭膜は白色半透明。臀鰭の各鰭条中央後方の鰭膜は淡い黄色を呈し、不明瞭な黄色帯を形成する。第7軟条から後方の臀鰭下部は白色。胸鰭および腹鰭は白色半透明）。胸鰭は白色半透明で、鰭条に黒色点散在する（鰭条の黒色点はない）。胸鰭基底上部に瞳孔径よりやや小さい茶褐色斑がある。腹鰭の下縁は白色に縁どられ、その上部は茶褐色（腹鰭は白色半透明）。尾鰭上部は後縁から朱色、白色、黄色の順に染まり、その前方には尾鰭上縁から尾鰭中央にかけて2-3列をなす赤褐色帯が斜行する（尾鰭鰭膜は白色半透明。尾鰭上部の縁どりはなく、軟条先端沿いの鰭膜は先端側から朱色、白色の順にわずかに色づく。尾鰭上部の軟条には赤褐色点と白色点

Table 1. Counts and measurements of specimens of *Favonigobius* sp. A.

	KAUM-I. 191342	KAUM-I. 213724
Standard length (SL; mm)	17.9	22.1
Counts		
Dorsal-fin rays	VI-I, 9	VI-I, 9
Anal-fin rays	I, 9	I, 9
Pectoral-fin rays	15	16
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5
Segmented caudal-fin rays	9+8	9+8
Branched caudal-fin rays	7+6	7+6
Pre-dorsal-fin scale rows	8	6
Lateral scales	29	28
Transverse scales ¹	8	9
Transverse scales ²	7	7
Transverse scales ³	7	7
Measurements (%SL)		
Total length	124.3	129.0
Head length	31.6	31.2
Head depth	14.8	15.4
Head width	17.0	16.6
Snout length	7.0	6.2
Jaw length	9.6	9.5
Eye diameter	8.4	9.2
Interorbital width	0.9	0.8
Body depth	13.4	13.7
Body width	13.5	13.3
Pre-dorsal-fin length	38.5	37.2
Pre-pelvic-fin length	30.7	31.3
Pre-anal-fin length	57.3	56.0
Caudal-peduncle length	22.7	22.3
Caudal-peduncle depth	8.8	9.0
Pectoral-fin length	24.4	24.5
Pelvic-fin length	27.8	29.0
Caudal-fin length	22.5	26.7
Basal length of first dorsal fin	13.6	14.8
Basal length of second dorsal fin	23.3	25.4
Basal length of anal fin	21.3	25.6

¹between anal-fin origin and 1st dorsal-fin base; ²anal-fin origin and 2nd dorsal-fin base; ³2nd dorsal-fin origin and anal-fin base.

があり、2列の同心円状の点列を交互に形成する)。尾鰭下部は緑みがかかった黄色(尾鰭下部の軟条および軟条沿いの鰭膜は淡い黄色)。尾鰭基底中央には扇形の1黒色斑がある。

分布 本種はこれまでに千葉県館山市、鹿児島県本土、大隅諸島(種子島)、奄美諸島(加計呂麻島・喜界島)、沖縄諸島(沖縄島)、八重山諸島(石垣島・西表島・与那国島)から記録されている(林・伊藤, 1978; 吉郷, 2014; 瀬能ほか, 2021; 百瀬, 2022, 2024; Motomura, 2023; 古橋ほか, 2024; 大井ほか, 2025; 本研究)。

採集時の状況 KAUM-I. 191342は、河口部がほぼ閉塞した丸木浜川の海域との接続部にあたる幅50 cm、水深5 cmほどの細流から干潮時に採集された(この接続域は満潮時には短時間のみ海没する)。同所には本個体と同サイズかつ数多くのゴクラクハゼ *Rhinogobius similis* Gill, 1859の加入個体と少数のヒメハゼが観察され、ほぼ全てのそれらを目視で観察・同定する中で、ヒメハゼ属の一種Aは1個体のみが発見され、採集された。

KAUM-I. 213724の採集地点は内之浦漁港南部に位置する砂質の干潟である。同地点は淡水が流入しており、干潮時には滯筋が形成される。本標本は大潮干潮時の調査において、水深0.1 mほどの滯筋から採集された。同地点では多数のヒメハゼとヒメハゼ属の一種D(KAUM-I. 213721–213723)のほか、ヒメハゼ *Eutaeniichthys gilli* Jordan and Snyder, 1901(KAUM-I. 213726)が確認された。2019年以降、第2著者らにより数度の調査が行われたがヒメハゼ属の一種Aはこれまで採集されていなかった。

備考 記載標本は体が太短いこと、背鰭および臀鰭軟条数が9であること、背鰭前方鱗数が6–8であること、背鰭棘が伸長しないこと、腹部が一様に白色であること、頭部が黒くならないこと、尾柄部後端の黒色斑が横長のバンド状であること、尾鰭基底の黒色斑は後端が二分しないこと、尾鰭上部に黒色斑がないこと、体側の4黒色斑の形状が楕円形であること、眼下の孔器列が1縦列であることが百瀬(2024)の示したヒメハゼ属の一種A *Favonigobius* sp. A sensu Momose (2024)の特徴と一致したため本種に同定された。

本種は主に大隅諸島以南から記録されており、百瀬(2024)は本種が千葉県において越冬している可能性は低いとしている。丸木浜川では2023年以降、継続的に調査を行っているが、本種はその後に確認されていない。本種と同様に主に大隅諸島以南から記録のある同属のミナミヒメハゼは薩摩半島南部の複数地点から記録されており、少数が越冬・再生産を行っている可能性が示唆されている(是枝ほか, 2024)。本研究で採集されたヒメハゼ属の一種Aはそれぞれの地点で1個体のみであることから、これらの地点において本種は定着しておらず、採集時点における本

種の出現は浮遊仔魚期に潮流によって南方から輸送されたことに起因するものと考えられる。

ヒメハゼ属の一種Aの記録は分布の項で示した通りであり、記載標本は本種の九州沿岸初記録である。百瀬(2024)は和名のないヒメハゼ属の4種(*Favonigobius* spp. A–D)について、分布実態が過小評価されている可能性を指摘した。記録の空白地点からも今後の調査によって同地域から本種が新たに記録される可能性がある。九州以北温帯域に一般にみられるヒメハゼは、第2背鰭軟条数が通常9である特徴をヒメハゼ属の一種Aと共有し、固定後においては混同が予想されるが、背鰭前方域の被鱗状態で識別される(ヒメハゼ属の一種Aは背鰭前方鱗が通常ある; ヒメハゼでは0)(百瀬, 2024)。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、鹿児島大学総合研究博物館魚類分類学研究室の学生やボランティアのみならずには、標本の作製および登録作業においてご協力いただいた。同研究室の古橋龍星氏、樋口聡文氏、金井聖弥氏、および前田知範氏、霧島市の久木田直斗氏、鹿児島大学アクアリウムサークル「クロミス」の皆様には採集調査にご協力いただいた。匿名の査読者とIchthy編集委員の吉田朋弘氏には原稿に対して適切な助言をいただいた。以上の方々に深く感謝申し上げます。本研究は鹿児島大学総合研究博物館の「鹿児島・琉球列島の魚類多様性調査プロジェクト」の一環として行われた。本研究の一部は公益財団法人日本海事科学振興財団「海の学びミュージアムサポート」、JSPS 科 研 費 (20H03311・21H03651・23K20304・24K02087)、JSPS 研究奨励費 (DC2: 24KJ1838)、JSPS 研究拠点形成事業—Bアジア・アフリカ学術基盤形成型 (CREPSUM JPJSCCB20200009)、文部科学省機能強化費「世界自然遺産候補地・奄美群島におけるグローバル教育研究拠点形成」、および鹿児島大学のミッション実現戦略分事業(奄美群島を中心とした「生物と文化の多様性保全」と「地方創生」の革新的融合モデル)の援助を受けた。

引用文献

- 明仁・坂本勝一・池田裕二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347–1608, 2109–2211. 中坊徹次(編)日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 明仁親王. 1984. ハゼ亜目, pp. 228–276. 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫(編)日本産魚類大図鑑(解説). 東海大学出版会, 東京.
- 古橋龍星・赤池貴大・是枝伶旺・橋本慎太郎・樋口聡文・金井聖弥・潮上太郎・中村亮太・清水直人・本村浩之. 2024. 与那国島から得られた魚類43種の記録. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 47: 9–20.
- 林 公義・伊藤 孝. 1978. 南西諸島のハゼ科魚類について (I). 横須賀市博物館研究報告(自然科学), 24: 59–82, pls. 1–11.

- 是枝伶旺・百瀬 樹・本村浩之. 2024. 薩摩半島から得られたミナミヒメハゼの記録, ヒメハゼ属の一種 *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014) の国内における分布状況, および両種の標徴に関する新知見. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 40: 1–16.
- 百瀬 樹. 2022. 奄美群島加計呂麻島から得られた日本初記録の *Hazeus ammophilus* サキンハゼ (新称) を含む同島初記録のハゼ科魚類 10 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 19: 8–18.
- 百瀬 樹. 2024. 本州から得られたヒメハゼ属魚類 4 種の記録とその識別形質についての検討. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 45: 19–45.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp.
- Motomura, H. 2023. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Tanega-shima and Mage-shima islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 20: 1–250.
- 大井真人・中村亮太・是枝伶旺・本村浩之. 2025. 奄美群島喜界島初記録のハゼ科魚類 9 種, およびハゼ科の一種 10 sensu Suzuki (2004) の形態学的特徴. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 55: 23–29.
- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2021. 新版 日本のハゼ. 平凡社, 東京. 588 pp.
- 渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏. 2017. 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の 1 未記載種と日本産同属魚類の分類の現状. *東海自然誌*, 10: 45–57.
- 渋川浩一・鈴木寿之・瀬能 宏. 2011. 琉球列島から得られた日本初記録のハゼ科 3 種. *大阪市立自然史博物館研究報告*, 65: 25–38.
- 吉郷英範. 2014. 琉球列島産陸水性魚類相および文献目録. *Fauna Ryukyuana*, 9: 1–153.